

# 子どもへ向けた総合的表現行事の構成指導

— キッズパークの実践報告を基に —

## Guidance for the expression events for children

— A Case Study based on a Presentation at the Kids Park —

環太平洋大学短期大学部人間発達学科

吉井ゆだね

YOSHII, Yudane

IPU Women's College

Department of Human Development

**要旨：**本実践報告は平成31年4月に宇和島市に新たにオープンした、宇和島市生涯学習センターパフィオうわじまにて行った、子ども向け総合的表現行事キッズパークでの本学学生の研究発表に取り組んだ成果について考察した。子どもが理解しやすい表現活動発表の場を設け、環太平洋大学短期大学部人間発達学科子ども教育専攻2年生の学生の将来の保育者としての企画力、実行力、構成員等を養うことを目的とする。

**キーワード：**子ども、表現、保育者養成、キッズパーク

### 1. はじめに

キッズパークは子ども向けの総合的表現行事である。環太平洋大学短期大学部人間発達学科子ども教育専攻2年生の学生（以下本学学生とする）を中心としたメンバーが企画運営を行う。保育士資格、幼稚園教諭資格取得の際に行われる宇和島市内の保育実習、幼稚園実習の園児を招待する。劇や手遊びを披露し、体を動かす様々なゲームの体験コーナーを設ける。本学学生にとって表現活動の研究発表の場である。

本稿は令和元年6月28日に開催した、キッズパークにおける表現発表内容についてどのような内容であったかを報告し、保育者として社会へ出る学生の子どもへ向けた総合的表現行事の意義を見出したい。

### 2. 研究の目的

将来保育士、幼稚園教諭を目指す本学学生に、子どもへ向けた表現活動の重要性を伝え、行事を開催する上で地域社会に根差した学内にとどまらない多角的な視点を養うことを目的とする。

### 3. 研究の方法

（1）今回の開催会場は宇和島駅横に新設された、宇和島市学習交流センターパフィオうわじまの一階である生涯学習センターを会場とした。同施設は2・3階を市立図書館、4階を子育て世代活動支援センターとなっている。子ども達に関する様々な設備が充実している面よりインスピレーションを受け、多くの遊びが体験できる遊園地・公園をイメージし、キッズパークというイベント名とした。

また、キッズパークのテーマは「将来の夢」と決定した。子ども達が成長していく過程において自らの将来像を描くことは、自身の目標を見つけ大人へなる為に欠かせない要因である。「夢」を睡眠時の夢と混同しないよう、低年齢の園児にも伝わるよう留意した。

（2）具体的な発表内容としてはステージを利用した劇（図①）、多目的ルームではボウリングや新聞紙プール・けんけんぱ・ふくわらい等身体を動かす遊びの屋台コーナー（図②）、ホワイエでは参加型装飾や絵本のよみきかせ（図③）、工作が可能な自由工房ではスライムに触る体験コーナー（図④）を設けた。これらの各コーナーを園児誘導の引率により参加者はスケジュールに従い巡回していく。



図①ステージの劇の様子



図②遊びの屋台コーナー



図③絵本よみかぜの様子

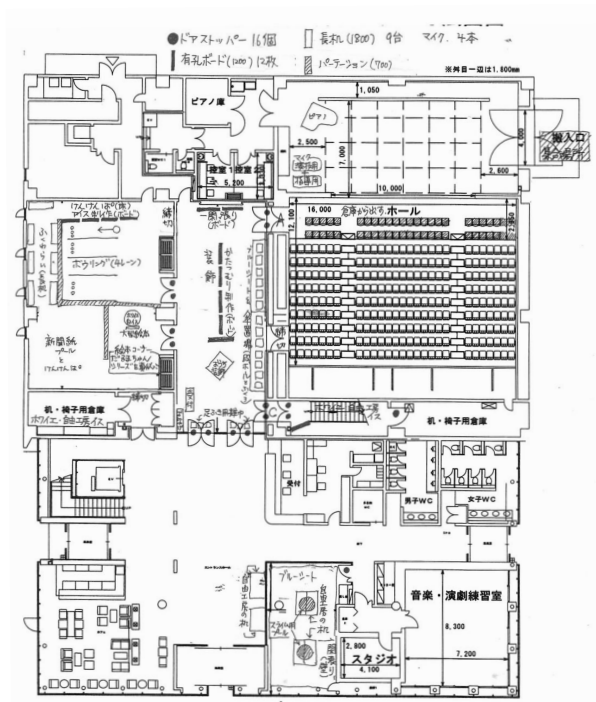


図④スライム体験コーナー

(3) 参加学生の役割を決定する。学生全体を統括する総リーダーに加え各コーナーごとに担当を決定していく。学生へ希望調査アンケートを取り、舞台表現が得意な者は劇へ、制作への造詣が深い者は装飾担当や遊びの屋台コーナーへといった感じで割り振られる。しかしながら今年度は1学年のみでの運営となる為、希望役割以外にもほとんどの学生が兼任しつつ開催に向けて準備を行っていく。

(4) 台本・会場内配置図を制作し、交通案内の情報を告知する。劇の台本と会場内配置図をグループごとに配布し全体の流れを把握する。参加者数が約600名近くとホールの座席数の2倍となった為劇の上演は2回とした。参加園を1回目上演と2回目上演に分け、1回目上演の間に多目的ルームやホワイエ、自由工房の各コーナーを巡回するシステムである。2回目上演の際にはこの逆を行う。先に述べた通り、園児誘導担当がキッズパークの要となるのは、園児たちをただ引率するだけではなく時間制限や安全面に配慮しつつ、すべてのコーナーを体験させる必要があるからである。

また、会場配置図(図⑤)については学生が自分の



図⑤会場内配置図

担当外についてもどのようなコーナーがあり子ども達の具体的な動きを予想する折に必須であった。とは



図⑥将来の夢 装飾

いえ新施設であるパフィオ宇和島には、キッズパークの準備期間である4～6月頃には平面図がまだ用意されておらず、一から学生側で制作をするところからスタートしている。同様に園バス等の乗降場所も未定であり、リーダーを中心としたメンバーがパフィオ宇和島、宇和島市役所との打ち合わせを行った。これらの情報は上演時間と共に参加園と学生広報との間で確認作業を行いつつ案内をした。パフィオうわじまはこの時点では初めて訪問する園も多く、当日のスムーズな進行の為には必須な過程だったと言える。

(5) 装飾・遊びの屋台・スライム制作を進める。装飾は主に観て楽しむものと参加型に分かれる。観て楽しむものは劇に出てきた幾つかの職業をベースにし、会場内で混雑が予想される個所に展示した。参加型の方は季節柄カタツムリの殻にシールを貼るタイプ・ビニール袋と色画用紙でアイスクリームやかき氷の容器を作り丸めたお花紙を追加するタイプであった。いずれも大型の共同制作が完成する。(図⑥、図⑦)

遊びの屋台ではカラフルな衝立やペットボトルを利用したボウリングのセット・新聞紙プールの為の周囲の仕切りや、プール内に隠す宝物としての様々な形のスポンジ、けんけんぱの為の新聞紙をビニールでつないだカラフルな輪、様々なキャラクターの顔を壁面制作にし、パーツごとにラミネート加工を施したふくわらい等を事前に用意した。子ども達が遊ぶ際に使う為、破損の恐れのある素材は使用せず耐久性を重視した。

(6) 劇・園児誘導の練習を行い会場内の流れを掴む。演技力向上に加え舞台上での演出やスムーズな進行ができるよう繰り返し練習を行う。特に園児を入れ替える1回目と2回目の上演の合間は園児誘導との連携が最も重要であり、すべての学生全体が協力し合い練習に取り組む。本番1か月前には実際の会場に出向



図⑦参加型装飾

きりハーサルも行う。その折はトランシーバーを使用し各自の現状を報告しあいながら進行していく。6月末、梅雨時期と体験コーナーでは動き回ることも考慮に入れ、雨天時用の傘・水筒等の荷物置き場も受付周辺に設置した。

#### 4. 研究発表

キッズパーク当日は宇和島市内の保育園・幼稚園・認定こども園の子ども達を担当毎に園児誘導の学生たちが迎え、上演時間や遊びの屋台等のスケジュールに沿った案内を行った。交通機関の都合上受付時間よりも早く到着する園もあったが、事前に各園に確認済みであり遊びの屋台やスライム体験を先に組みこんだ園児誘導を行い、待ち時間を回避した。限られたスペースで園児・学生・引率教員が動く為、園児誘導の学生が子ども達に自分を覚えてもらうよう自己紹介を行い、誘導中もこまめに人数確認・声掛けを行った。

劇の内容についてはゆっくりとはきはきした演技を心がけ、子ども達の理解が得られやすいよう、自分のやりたいこと・将来の夢を考える園児が主人公となることで身近に感じられるよう工夫を凝らした。他のコーナーへ向かう時にも将来の夢というテーマに沿い、一貫性を損なわない会場の雰囲気づくりを重視した台詞で園児たちの入れ替えを行った。ボウリングや新聞紙プール・けんけんぱ・ふくわらい・スライム体験では空いているコーナーをトランシーバーで連絡を取り合い、待ち時間を避け効率よく楽しめるよう臨機応変に対応をする姿が見られた。

すべてのプログラムが終了し、お見送りをする際にもお土産を渡し忘れ物が無いようチェックを行った。参加園によって園バス・徒歩・JRや市バス等の公共交通機関利用と帰路にも幾種類かのパターンがあり、それに合わせた出入り口から見送った。



## 5. 結論

今回の研究発表では学生個々の役割分担に応じた動きに加え、大人数で一つのイベントを完成させる為に協力しあう姿が印象的であった。

制限された時間と空間の中で多くの子ども達を事故・迷子等に留意しながら楽しませる、この目標達成の為に事前には綿密な園児誘導の計画が必要となる。計画遂行においては総リーダーを中心とし、幾パターンもの予想を立てることが何より重要となる。学生側の気づきのみでは勿論不十分な点もあり、短大側の指導においては保育者としての多角的な視点を多く学生に気づかせられるかがポイントとなる。

今後の課題としては開催側の行事全体へのこまやかな予測が改めて必要となってくる。発表内容そのものについて重点を置いて考えがちではあるが、滞りない誘導や安全面への配慮も必要不可欠である。当日の動きに加え新施設であるうわじまパフィオについての周知、交通機関へのアクセス方法、園バスからの乗降の為にスペース確保やその為に市への申請等多岐にわたる。当日の他フロアへの配慮や駐車場確保、一般利用者への説明等、地域の利用者に対する理解も必要となる。

こういったイベント全体へむけた意識は将来の保育者としての大きな財産になる。学内にとどまらず学生自身の行う試みが実習園へ、地域へと多方面の協力無くしての実現は無いことを知る為である。この経験は就職後も大いに活かされと考えられる。保育者同士での連携の取り方は勿論、社会人として一事業所内での動きに捕らわれず地域と共に歩む広い視点を体感する機会となった。

## 参考文献

- ・「保育の表現技術実践ワーク～かんじる・かんがえる・つくる・つたえる～」  
今井真理 編著 2016 保育出版社
- ・「児童文化がひらく豊かな保育実践」  
中坪史典 編著 2009 保育出版社
- ・「保育者のための言語表現の技術～子どもとひらく児童文化財をもちいた保育実践～」  
古橋和男 編著 2016 萌文書林